

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：13501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17421

研究課題名(和文) 自閉スペクトラム症児における協同活動の特徴とその発達支援

研究課題名(英文) The characteristic of cooperative activities and the facilitation of cooperative activities in children with autism spectrum disorder

研究代表者

吉井 勘人 (YOSHII, Sadahito)

山梨大学・大学院総合研究部・准教授

研究者番号：30736377

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：自閉スペクトラム症(ASD)児における仲間との協同活動の特徴と協同活動を促進するための支援方法について検討した。前者では、ASD児のペアを対象として、顔の形を構成する課題などを縦断的に実施し、協同活動の変化を質的に分析した。その結果、初期には無反応や自己中心的な行為で協同活動が成立しなかったが、後期には言語を介して協同活動が成立するプロセスが見出された。後者では、一方向的な関わりにより仲間関係に困難を示す幼児への協同活動を促進する支援を行った。その結果、仲間への協調的なコミュニケーションが増加する結果が得られた。以上より、ASD児における協同活動の困難さの特徴とその発達可能性が示された。

研究成果の概要(英文)：This study examined the characteristics of cooperative activities in children with ASD and intervention methods to promote cooperative activities in children with ASD. First, Two pairs of children with ASD participated in tasks which make up faces longitudinally. And the process of cooperative activities was qualitatively analyzed. As a result, children with ASD succeeded gradually in cooperative tasks. Cooperative activities did not succeed initially because of "no response" and "self-centered actions" to their peer. But cooperative activities, by using language, succeeded in the latter half. Second, We assisted cooperative activities for the child with special needs who has difficulties in peer relationships. As a result, participant increased cooperative communication with peers. Results suggested the characteristics of the difficulties of cooperative activities in children with ASD and their developmental possibilities.

研究分野：社会科学

キーワード：自閉スペクトラム症児 協同活動 言語 仲間

### 1. 研究開始当初の背景

子どもが主体的に学校生活や地域社会に参加するためには、他者と一緒に遊んだり、制作したり、学習したりするなどの協同活動の遂行が必要不可欠である。定型発達児では、1歳半ばから、意図の共有に基づく非言語的な協同活動が成立し、3~5歳にかけては、言語を使用して協同でプランニングする機能が高まっていくとされる。このように、協同活動は非言語レベルから言語レベルへと発達していくと考えられる。一方、自閉スペクトラム症(ASD)児は、社会的認知に中核的な問題を示し、特に、非言語レベルでの協同活動の遂行に困難を示すことがわかっている。しかしながら、言語表出が可能なレベルにあるASD児が言語を用いて、仲間とどのように協同活動を行うのかといった特徴については十分に検討されていない。また、協同活動の獲得を促すための有効な支援方法についても十分に検証されていないといえる。従って、ASD児における仲間との協同活動の特徴、並びに、協同活動を促進するための支援方法の開発が必要であると考えられる。

### 2. 研究の目的

第1に、言語表出の可能なASD児の2組のペアを対象として、顔を制作する課題と魚釣り課題を実施し、その相互作用を縦断的に観察することで、ASD児の仲間との協同活動の特徴を検討する。第2に、一方的な主張などにより仲間とのコミュニケーションに困難を示す幼児を対象として協同活動を促進するための支援を行い、効果的な支援方法について検討する。

### 3. 研究の方法

#### (1) ASD児における仲間との協同活動の特徴

対象児：特別支援学校に在籍する、知的障害を伴う自閉症児のペア2事例(4名)を対象とした。全ての対象児は言語表出が可能であった。

手続き：子ども同士で協同する課題を実施した。〈研究 - 1〉では、子ども同士で目、鼻、口などのパーツシールを顔の台紙に貼って顔の形を構成する「顔の制作」課題を実施した。〈研究 - 2〉では、子ども同士で1本の釣り竿を使って魚釣りを行う課題を実施した。課題は、原則として3カ月に1回の頻度で、計6回、約2年の期間実施した。

記録・分析：子ども同士の相互作用はビデオで記録した。子どもの発話、視線、動作などを逐一書き起こした。次に、各児の発話と動作をそれぞれ機能(要求、叙述、質問等)に分類した。最後に、ペアにおける発話の組み合わせ(A児：指示-B児：応答など)から、協同性に関するエピソード分類を行った。協同性を志向する行為は、[知覚的共有]：二者が同一の対象を注視する、[注意の共有]：始発の共同注意(指さしの表出等)とそれに

対する応答、[身体・動きの共有]：動作や言語の表出とその模倣、[事物の受け渡し]：差し出した物を受け取る、[基礎的協同]：目標を共有して相補的に行為する、[高次な協同]：プラン(複数の行為)に関する相互了解や行為後の相互確認、[相互支援]：援助とそれに対する応答、とした。協同性を志向しない行為は、[無反応]、[拒否]、[回避]、[占有]、[自己中心的行為]、[意図のずれ]とした。

#### (2) 協同活動を促進するための支援方法

対象児：幼稚園の年長クラスに在籍する女児(以下A児とする)であり、療育機関も利用していた。仲間関係では、些細な出来事から「B(他児)のせいだ!」などと相手の考えを受け入れないで、一方的に自分の考えを主張してしまうため、仲間との相互作用を維持することに困難さがみられた。

手続き：三者による共同での制作遊びにおいて、仲間の発話に関連のある発話をして三者間コミュニケーションを維持することを支援目標とした。支援期間は平成X年5月から9月で、計8回のセッションを幼稚園の教室を借りて実施した。「お顔」や「お弁当」を制作のテーマとして、そのテーマに沿って、A児と他児2名の3名で複数のパーツを使って形を完成させる制作遊びの「一緒に作るうゲーム」スクリプトを実施した(例えば「お顔」では、目や鼻などのパーツを組み合わせる顔の形をつくる)。支援計画は、支援者が援助を行わない事前評価期(S1、S2)と事後評価(S8)、支援者が子ども同士をつなぐ援助を行う支援期(S3~7)の計8回で構成した。支援期では、子ども同士をつなぐ援助として、A児の発言を明確にして他児に伝える、児の内面について質問する、ルールについて確認するなどの24の方略を適宜用いた。

記録・分析：支援は全てビデオカメラで録画した。三者間での相互作用において、関連のある発話の維持とは、話者の先行するトピック(話者が注意を向けている物や活動)に合わせた後続発話をする事と定義した。そして、トピックの切り替え(例えば、「お顔」の制作遊びでは、顔を構成するパーツの目のトピックから口のトピックに替わる)や相互作用の中断(子どもがその場を離れるなど)によって、先行発話のトピックが維持されない際には、三者間の関連のある発話の維持が途切れたとした。各セッションにおける三者間の関連のある発話の維持の平均生起頻度を算出した。

### 4. 研究成果

#### <研究 - 1 : 「顔の制作」課題>

##### 【結果】

#### (1) 事例1のエピソード

観察1回目 Ep1 知覚的共有：A児「B、ほっぺ」(パーツシールを手元の台紙に貼る)〔叙述：自己〕 B児「あめめ・」(A児の貼る行動を注視する)〔他者への注目〕 Ep2 無反応：A児(シールを貼る)「ほっぺになった」〔叙

述：自己） B 児（鼻歌を歌いながら A 児とは異なる方向を注視する）〔無反応〕。  
観察 6 回目 Ep3 事物の受け渡し：A 児「…もっと、貼って」（シールシートを B 児に差し出す）〔要求：他者行為〕 B 児（シートを受け取るが、貼らない）〔動作応答〕。Ep4 拒否：A 児「B くん、貼って」（パーツシールを B 児に向けて差し出す）〔要求：他者行為〕 B 児（手を引いてシートを受け取らない）〔拒否〕。

#### 【考察】

事例 1 のペアでは、知覚的共有や事物の受け渡しといった相互的関与は生じたが、観察経過を通して共同注意や相互に目標を共有した協同活動の成立は困難であった。横取りや拒否が相互にみられたが、各児が協同して顔を制作しようとするよりも、自分一人で台紙を占有して顔を作ろうとしていたためと考えられる。

#### （2）事例 2 のエピソード

観察 1 回目 Ep1 知覚的共有：C 児「幽霊の場合、鼻がこれだね」（パーツシールを台紙に近づける）〔叙述：自己〕 D 児（C 児の貼ろうとする行動を注視する）〔他者への注目〕。Ep2 無反応：C 児「これで、鼻がないんですよ。ゆうれいは…」（パーツシールを持って、台紙に貼ろうとする）〔叙述：自己〕

D 児（台紙は注視しないで、自分の持っているパーツシールを注視する）〔無反応〕。

観察 6 回目 Ep3 基礎的な協同：D 児「じゃあ、これは？」（髭のパーツシールを台紙に近づけて、C 児に貼ってよいかをたずねる）〔質問：確認〕 C 児「おーいいねえ！」〔応答〕。Ep4 高次の協同：C 児（絵本のページをめくりながら）「こわい顔にしよう」〔提案：プラン〕 D 児「うん」（頷く）〔応答〕。

#### 【考察】

事例 2 のペアでは、観察経過を通して、知覚的共有や身体・動きの共有から基礎的協同や高次の協同が成立するようになった。協同活動が成立した要因としては、自己のプランについて提案する発話や仲間のプランについて質問する発話が重要な役割を果たしていたと推察される。

< 研究 - 2 「魚釣り」課題 >

#### 【結果】

##### （1）事例 1 のエピソード

観察 1 回目 Ep1 拒否：B 児（A 児の持つ釣り竿に手を伸ばす）〔動作的要求〕 A 児（釣り竿を手前に引く）〔拒否〕。Ep2 知覚的共有：A 児（笑顔で魚を釣る）「えっ、これ」〔叙述：自己〕 B 児（A 児の魚を釣る行動を注視する）〔他者への注目〕。

観察 6 回目 Ep3 物の受け渡し：A 児「B くん、次は B くんだよ」（釣り竿を B 児の手に持たせようとする）〔要求：他者行為〕 B 児（釣り竿を持つ）〔動作応答〕。Ep4 自己中心的行為：A 児（B 児の持つ釣り竿と一緒に持って釣りをしようとする） B 児（自分が持っている釣り竿を手前に引く）〔拒否〕。

#### 【考察】

1 回目では A 児のみが釣りをを行い、B 児はそれを注視するといった知覚的共有が成立した。6 回目では、A 児が「B くん、次は B くんだよ」と言って、B 児に釣る順番を譲るものの、B 児が釣り竿を持つと A 児はそれを一緒に持とうとするなどの自己中心的行為がみられ、二者が順番に釣りをするというルール共有に基づく協同活動は成立しなかった。その要因として、協同で活動するためのプランを提案する発話や相手のプランについて質問する発話が生起しないことが関係していると考えられる。

#### （2）事例 2 のエピソード

観察 1 回目 Ep1 知覚的共有：C 児「じゃあ、これ釣ります。」（魚を釣り上げる）〔叙述：自己〕 D 児（C 児の魚を釣る行動を注視する）〔他者への注目〕。Ep2 自己中心的行為：D 児「ねえ、ぼくは」（C 児の持つ釣り竿を要求する）〔要求：物〕 C 児（自分の釣り上げた魚を見ながら）「これ、こう」〔叙述：自己〕。

観察 6 回目 Ep3 高次の協同：C 児（釣る順番について、自分と D 児を交互に指しながら）「1、2、1、2 ってやる」〔提案：プラン〕 D 児「うん」（頷く）〔応答〕。Ep4 基礎的な協同：C 児（釣り竿を D 児に差し出す）「はい、どうぞ」〔供与〕 D 児（釣り竿を受け取り、魚を釣る）〔応答〕。

#### 【考察】

1 回目では、D 児が自分の釣る番を要求するものの C 児はそれに応じず、C 児のみが釣りをするという自己中心的行為がみられた。しかし、6 回目では、C 児から自発的に釣る順番に関するプランを提案して、それを D 児が承諾することで、1 回ずつ交互に釣りを行うことができた。ASD 児が仲間との間で、魚を釣るといった目標を共有するだけでなく、釣る順番といったルールを共有して協同活動を成立させることが見出された。協同活動を成立させる上で、ルールを相互に確立するための発話の役割の重要性が示唆された。

< 研究 : 協同活動を促進するための支援方法 >

#### 【結果】

三者間での関連のある発話の維持の変化  
図 1 では、セッション毎に、三者間での関連のある発話の維持に関する平均生起頻度（破線）を示した。事前評価期のセッション 1 の 1 試行目は 3.78、セッション 2 の 2 試行目は 4.3、3 試行目は 8、4 試行目は 5.4 であった。支援期に入り、セッション 3 の 5 試行目は 10.43、セッション 4 の 6 試行目は 10.4、7 試行目で 16.11、セッション 6 の 8 試行目で 15.76、セッション 7 の 9 試行目で 11.65 であった。事後評価のセッション 8 の 10 試行目で 7.66 であった。以上より、関連のある発話の維持は、事前評価期に比べて、支援期では増加し、事後評価でもやや増加したといえる。

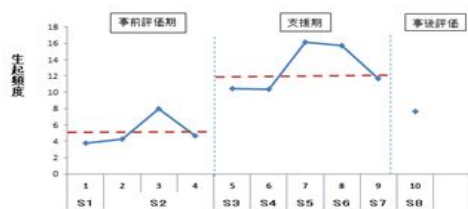


図1: 関連のある発話の平均生起頻度の変化

### 【考察】

共同制作遊びを用いた支援により、仲間との関わりに困難を示す幼児の三者間でのトピックを共有したコミュニケーションが促進されたと考えられる。その要因としては、意図的に子ども同士で協力する共同制作活動を設定して繰り返し実施したこと、また、子ども同士のコミュニケーションが破綻しそうな際に、子ども同士をつなぐ支援として、子どもの内面を言語化して他児に伝える、子どもの内面について質問する、また、子どもが他児に対して強く主張した際には、ゲームのルールを確認するなどの援助が有効であったと考えられる。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

1. 早川瑞穂・吉井勲人 (2018) 特別な支援を要する幼児とその仲間との三者間コミュニケーションの変化 「一緒に作ろうゲーム」スクリプトを用いた支援を通して、教育実践学研究, 22, 23-34. 査読無.

[学会発表](計5件)

1. 吉井勲人. 自閉スペクトラム症児の言語を介した仲間との協同活動の特徴 「顔づくり」課題における相互作用の分析を通して . 日本発達心理学会第 29 回大会, P3-43 . 2018 .
2. 板倉達哉・吉井勲人・若井広太郎・仲野みこ・長崎勤・熊谷恵子. 子ども同士の協同活動発達アセスメントの開発(3) - アセスメント標準化のための経過検討 - . 日本発達心理学会第 29 回大会, P6-5. 2018 .
3. 吉井勲人. 自閉スペクトラム症児の言語を介した仲間との協同活動の特徴 「船の色塗り」課題における相互作用の分析を通して . 日本特殊教育学会第 55 回大会, P 6 -52 . 2017 .
4. 板倉達哉・吉井勲人・若井広太郎・仲野みこ・長崎勤・熊谷恵子. 典型発達幼児同士の協同活動の発達アセスメントと支援(3) : 3~5歳児の課題差における会話と注視に関する基礎的研究 . 日本発達心理学会第 28 回大会, P5-7 . 2017 .
5. 吉井勲人. 自閉スペクトラム症児の言語を介した仲間との協同活動の特徴 : 「魚釣

りゲーム」での相互作用の分析を通して、日本発達心理学会第 28 回大会, P4-18 . 2017 .

[図書](計1件)

1. 吉井勲人 (2016) コラム社会語用論的アプローチ . 尾崎康子・三宅篤子 (編著) 乳幼児期における発達障害の理解と支援 知っておきたい発達障害の療育 . 77-82 . ミネルヴァ書房 .

### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉井 勲人 (YOSHII, Sadahito)

(山梨大学・大学院総合研究部・准教授)

研究者番号 : 30736377